99

足利学校における『素問』の講義をめぐって
――周曰校校刊本――

野澤　隆幸，小曽戸　洋
北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

足利学校は室町時代，関東における漢学の殿堂として学者の育成に貢献した．中国医学の聖典である『黄帝内経素問』の講義もかつて行われたことを示す資料がある．国立公文書館内閣文庫所蔵の『重広補注黄帝素問』24巻（5冊，江戸医学館旧蔵，300函・146号．以下本書と称す）がそれで，すでに指摘されるところであるが，詳しくは検討されていない．以下，本書に関して若干の考察を行う．

本書第1冊の巻首には，安土桃山～江戸初期頃の筆跡と思われる1葉が補綴され，「素問」の名義説明より始まり，60ばかりの語彙に対する和文の解釈が記されている．これらのほとんどは，次の2葉の林億等「重広補注黄帝内経素問序」中の字句の釈文である．当該葉の末行には「此一帖足利ニテ講義ノ〔貶？弁の意か?〕ニシテ如此ナルヲ書置也」とも読める記載があり，これが足利学校にて『素問』の講義が行われたという根拠である．最初に指摘したのは『内閣文庫百年史』（汲古書院・1985，137頁）で，次のようにある．

> ……（内閣）文庫本は，万暦中に周日（ママ）の校刊したもの．……本書の巻頭に足利学校にて『素問』の講説があった時の備忘を付し，本文は饗庭東庵所蔵の古写本をもって校訂している．従来，『素問』の講説は，江戸期に入り，京都にて饗庭・林の両氏これを創始すという（日本医学史）定説を覆す新史料であるとともに現存不明の鎌倉期古写本の面影を知る点において，重要な資料である．

しかし「饗庭東庵所蔵の古写本をもって校訂」の根拠はどこにあるのか．本書には毎冊首に篆文で「泰葊（菴）」の蔵書印がある．『内閣文庫漢籍分類目録』（1956）には本書を「饗庭泰庵旧蔵」としてある．それは「泰葊」の印に拠ったのであろうが，姓に饗庭を冠するには疑義がある．泰庵 → 饗庭泰庵 → 饗庭東庵と誤認を重ねた結果である．本書の第1冊総目録の直前には手写で「是書乃医家至切至要之文惜乎旧本訛舛漏落有誤学者本堂今求元豊孫校正家蔵善本重加訂正分為一十二巻以便検閲……」とある．「家蔵善本」を「饗庭東庵所蔵の古写本」と解釈したものか．だが実はこの「是書乃医家……」の文は，元・古林書堂本にある刊木記をそのまま写したものである．『内閣文庫百年史』の説は当たらない．ちなみに饗庭東庵は通称玄伯，生没は1621～73年．子も東庵を襲名し，立伯と称した．

本書を刊行した周曰校という人物は，金陵の人で，号は対峯．書堂を万巻楼あるいは仁寿堂と称し，万暦年間に多くの書物を刊行した．万暦16年（1588）には『万病回春』の初版を刊行しており（万暦30年第2版の刊行者・周文憲はその子か），本書では繡谷書林と自称している．本書の刊行年次は確定できないが，他書の刊行年から推して万暦10～30年代とすると，日本への渡来は文禄・慶長・元和頃（16世紀末～17世紀初）かと思われる．

周曰校はその名からして，従来「周曰の校刊」と誤解されることが多いが，周が姓，曰校は名である．岡西為人，『内閣文庫漢籍分類目録』，『内閣文庫百年史』，『日本書誌学事典』（医書目録の項）など日本の書誌学界ではこぞってその過ちを犯してきた．演者小曽戸（『中国医学古典と日本』）もそうであった．日本でかつてその誤りに気付いたのは真柳誠氏である（台湾の友人の教示による由）．これを機会に自らの非を恥じ，過去の誤りを訂正したい．